

# 古墳時代中期前半の河内平野における 朝鮮半島系遺物の流入に関する考察

井 上 主 税

## A Study on the Inflow of Korean Artifacts to the Osaka Plain During the First Half of the Middle Kofun Period

INOUE Chikara

Japan's relationship with its neighbors transformed as the situation in East Asia changed at the beginning of the middle Kofun period at the end of the 4th century. Large, keyhole-shaped burial mounds were constructed, from the Saki tumulus in the Northern regions of the Yamato basin to the Mozu-Furuichi tumulus on the Osaka Plain. An influx of artifacts from the Korean Peninsula was witnessed at this time along with the inflow of skilled people from overseas. It is believed that Japan adopted an advanced culture in its entirety and attained productive techniques in return.

It is believed that the Osaka Plain, where the Mozu-Furuichi tumulus was built because of Japan's changing overseas relationships, also offered port facilities such as at Naniwatsu. Such port facilities can be observed in historical materials.

When did this accumulation of goods, in particular Korean artifacts, begin on the Osaka Plain? This paper examined the burial circumstances of Korean artifacts in the first half of the middle Kofun period, focusing on the tumuli found in the central part of the Kinki region. The results revealed the existence of only one tumulus on the Osaka Plain in which Korean artifacts were buried in the early Kofun period. However, the study also confirmed the existence of ancient burial mounds, in which Korean artifacts were buried, at the end of the 4th century in the Furuichi tumulus, Kitakawachi, and Izumi areas. It can thus be concluded that the accumulation of Korean artifacts began on the Osaka Plain at the end of the

4th century, and that full-scale accretion began at the beginning of the 5th century with the initiation of the burial to the Mozu-Furuichi tumulus.

The genealogy of Korean artifacts is centered on Gaya, but unlike the early Kofun period, they include Silla and Baekje artifacts. The number of relics inspired by Silla increased after the 5th century, which is related to the decline of Geumgwan Gaya.

キーワード：朝鮮半島系遺物 (Korean artifacts)、副葬品 (grave goods)、河内平野 (Osaka Plain)、百舌鳥・古市古墳群 (Mozu-Furuichi Tumulus)、港湾施設 (port facilities)

## はじめに

古墳時代中期初めの4世紀末以降、大型の前方後円墳は大和盆地北部の佐紀古墳群から河内平野の百舌鳥・古市古墳群に造営されるようになり、副葬品にも帯金式甲冑をはじめとする鉄製武具や鉄製武器の占める割合が高くなる。その要因の一つには東アジア情勢の変化にとまなう対外関係の変化が挙げられよう。5世紀になると瀬戸内ルート的重要性が高まり、難波津<sup>1)</sup>の国際港湾都市としての位置が確固たるものになったとの見解(寺沢 2000)があるように、河内平野にいくつかの港湾施設が整備されたと推測される。

古代において難波と呼ばれた上町台地周辺は大阪湾に面しており、瀬戸内海の水運によって西日本各地をはじめ朝鮮半島ともつながり、また大和川水系によって、大和地域と直結していた。そのため交通の要衝として重要視され、古くより住吉津や難波津などの国家的な港を中心として繁栄し、活発な経済、外交活動の舞台となった(植木 2009)。この地域の開発は5世紀にさかのぼり、法円坂遺跡(難波宮下層遺跡)(大阪府大阪市)では5世紀中葉の大規模な倉庫群が確認されている。近年では5世紀前半の上町谷1・2号窯跡が発見され、初期須恵器が生産されていたことも明らかになっている。

この難波地域に、もう少し広くみて河内平野に、物資の中でも朝鮮半島系遺物<sup>2)</sup>の集積はいつから始まるのであろうか。これまで朝鮮半島からの渡来人の動きをあらわす資料として韓式系土器の検討が行われてきたが、本稿では近畿地方中央部(のちの畿内)の古墳を中心に、古墳時代中期前半における朝鮮半島系遺物の副葬状況を検討する。この時期に朝鮮半島系遺物が

1) 難波堀江にあったとされる「難波津」の位置については、これまで港湾施設等が確認されておらず、確定が難しい。

2) 朝鮮半島系遺物には、朝鮮半島で製作されたもののほか、倭国で渡来人によって製作されたとみられるものや、朝鮮半島を経由してもたらされたものも一部含まれる。

副葬された古墳の分布やその性格を明らかにすることは、当時の対外関係や政治的状況を解明するうえで重要な課題と考える。

## 1 古墳時代中期初めの倭国および東アジア情勢

朝鮮半島東南部（主に金官加耶）との交渉を主導したヤマト王権は、大王墓の葬地をそれまでの大和盆地北部（佐紀古墳群）から、河内平野（百舌鳥・古市古墳群）へと移す。ヤマト王権が『古事記』や『日本書紀』にみられるように大和の地に多くの宮殿を営みながら、葬地を移動した背景には、対外関係の方針等をめぐり、ヤマト王権中枢の主導権争いがあったとみるのが妥当かもしれない。

ヤマト王権と金官加耶の関係は、百舌鳥・古市古墳群が造営され始めた4世紀末になると変化を迎え、金官加耶の中心古墳群である大成洞古墳群において、巴形銅器や鍬形石製品などの威信財というべき倭系遺物はその副葬を終える。そのため、この時期がヤマト王権と金官加耶との関係における一つの画期と考えている（井上 2014）。おそらく倭の対外関係において変動が起こった可能性が高く、このことは百済との通交の開始や高句麗の南征など、東アジア情勢の変化と密接に関連したものと考えられる。このように、大王墓を含む大型古墳群の変遷には少なからず、東アジア情勢の変化が関連したと推測される。

5世紀初めの高句麗南征による金官加耶の衰退は、大成洞古墳群における大型古墳の築造中断としてあらわれる。そして、5世紀中葉以降の大成洞古墳群では、倭系遺物は確認できなくなる。このような情勢のなか、倭国においては、朝鮮半島から遺物だけでなく、技術者集団が渡来し、鍛冶・金工・窯業などの生産技術、騎馬の技術、土木技術などが流入している。

## 2 難波地域および河内湖周辺出土の韓式系土器からみた渡来人の動向

古墳時代中期に入り、朝鮮半島から遺物の流入だけでなく、技術者集団が渡来したことによって、先進的な文化・技術の本格的な受容がなされ、古墳時代の社会に大きな影響が及んだ。この渡来人の存在は、考古資料からだけでなく、やや不確実ではあるが『日本書紀』応神天皇20年9月条には、倭漢直の祖である阿知使主とその子の都加使主が党類17県を率いてやってきたと記されている。

生産基盤として、須恵器生産は河内から和泉の陶邑に、馬匹生産の牧は北河内に置かれた。また、武器・武具などの重要な鉄器生産の大規模な工房は布留遺跡（奈良県天理市）周辺や葛城地域などの大和盆地と、大泉遺跡（大阪府柏原市）や森遺跡（大阪府交野市）などの河内平野の双方に置かれた（白石 2009）（図1）。

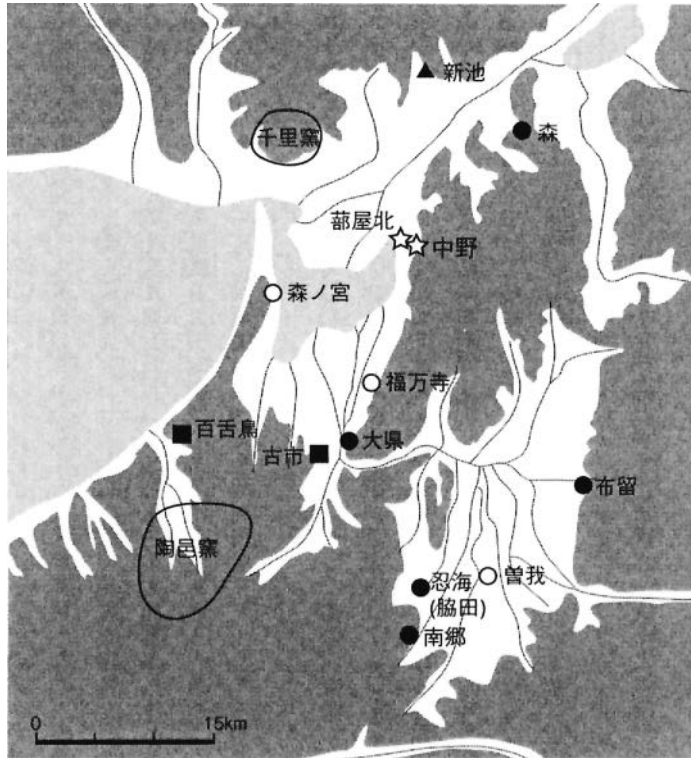


図1 ヤマト王権の生産基盤（菱田 2007一部改変）

● 鍛冶・造兵 ○ 玉作り ▲ 埴輪窯 ☆ 馬（牧） ■ 造墓

5・6世紀の韓式系土器を通じた河内湖周辺の渡来人の動向については、田中清美氏が、8つの地区（①枚方台地遺跡群、②北河内遺跡群、③中河内遺跡群、④河内低地～河内台地北縁遺跡群、⑤南河内遺跡群、⑥淀川低地遺跡群、⑦上町台地と北方砂堆遺跡群、⑧摂津遺跡）に区分して、それぞれの遺跡群から出土した韓式系土器を詳細に検討した<sup>3)</sup>（田中 2005など）。一連の研究によると、渡来人が最初に集住した時期は5世紀第1四半期頃で、④の河内低地縁部から河内台地北縁部の開発が着手されたとみた。そして、摂津・河内地域における渡来人たちの集住のピークは、5世紀第1四半期と5世紀第4四半期であったとし、河内湖岸の沖積低地の開発には最新の土木技術を携えてきた渡来人たちが関係したと結論づけた（図2）。

3) 韓式系土器の分布からは、河内平野に最も集中がみられ、大和では盆地の中でも南部にまとまりが確認できる。

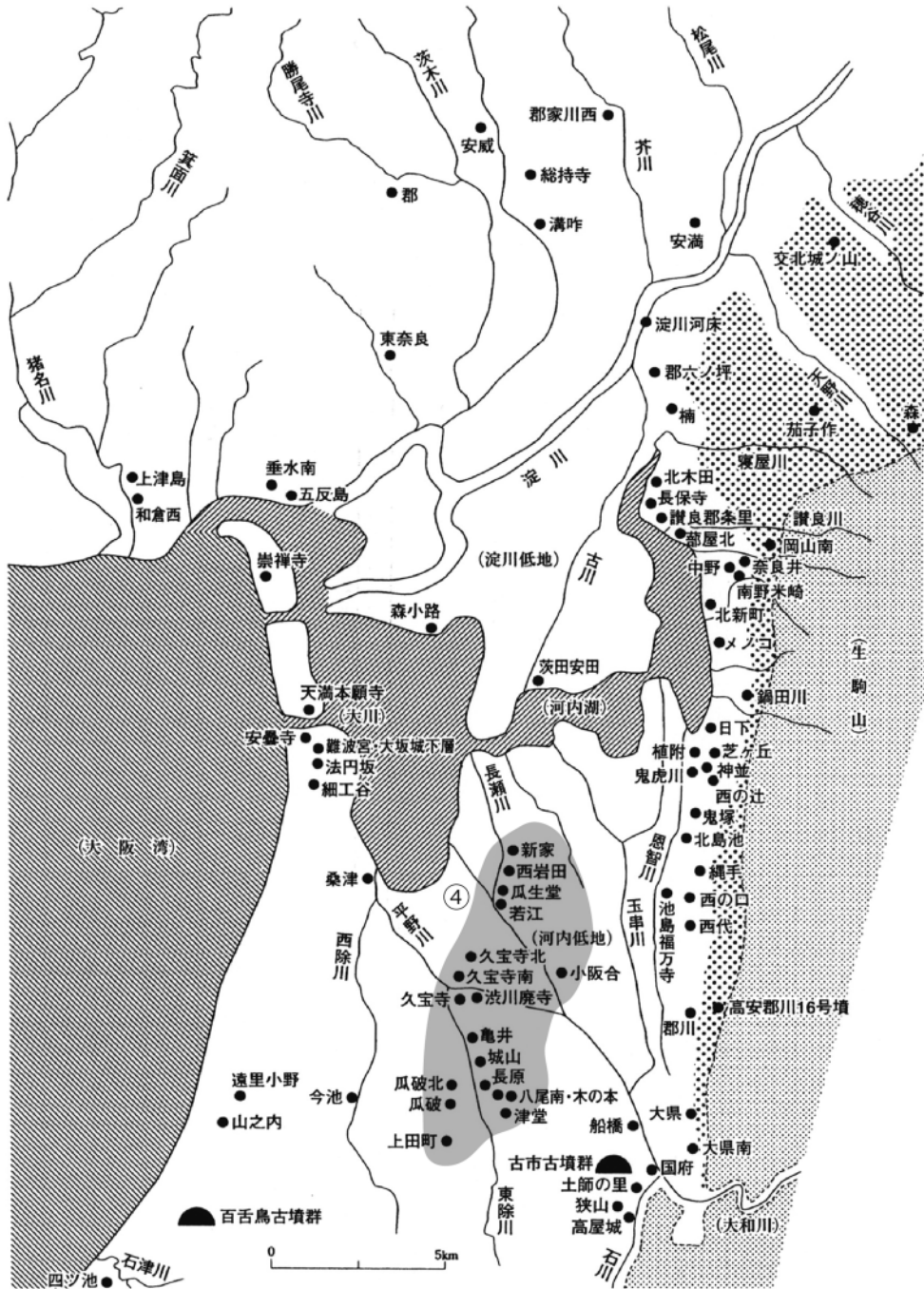


図2 摂津・河内地域の韓式系土器出土遺跡分布図（田中 2005一部改変）

●は韓式系土器出土遺跡、網掛け部分が④河内低地～河内台地北縁遺跡群

難波地域に目を移すと、難波堀江（現在の大河川）から南に延びる大手前谷の南端には、5世紀中葉の倉庫群（法円坂遺跡）が建つ難波宮中部地区があり、同地区は6世紀前葉以降も掘立柱建物が集中することから、ヤマト王権の重要な施設が置かれた場所であった可能性が高い（田中 2014）。これと関連して、難波宮北部地区では5・6世紀の百濟（栄山江流域）や加耶の軟質土器やこれに系譜が求められる韓式系土器が出土しており、渡来人が集住する交易の拠点があったとみられている。

### 3 古墳出土資料の検討

ここでは、古墳時代中期前半の朝鮮半島系遺物を副葬した古墳を主に取り上げ、副葬状況などを検討する（表1）。

#### (1) 馬具

これまで近畿地方で確認された初期の馬具資料のなかでは、5世紀初頭の行者塚古墳例（兵庫県加古川市）が最も古く、これに続くのが5世紀前葉の南山4号墳例（奈良県橿原市）や鞍塚古墳例（大阪府藤井寺市）、七観古墳例（大阪府堺市）などであり、鉄製轡や木心鉄板張輪鐙、鉄製鞍金具が確認できる。日本列島において初期資料が出土したこれらの古墳には、馬具以外にも鉄鋌をはじめとする朝鮮半島南部と関連する副葬品が多く認められるという特徴をもつ。

行者塚古墳出土の1号轡（円形鏡板付轡）、2号轡（長方形鏡板付轡）、3号轡（鏤轡）については、金官加耶や百濟に系譜が求められる可能性が高いとされる（諫早 2012）。

南山4号墳出土の轡は短い二条線引手をもつもので、釜山地域などに系譜が求められる。

鞍塚古墳例や七観古墳例は、ヤマト王権中枢である古市・百舌鳥古墳群において馬具が副葬される時期に該当する。いずれも大王墓に隣接する古墳からの出土である。鞍塚古墳では鏡板轡や木心鉄板張輪鐙、鉄製の洲浜・磯分離鞍などが、七観古墳では環板轡や木心鉄板張輪鐙、鞍金具などが出土しており、最近の研究では新羅馬具と評価される（朴 2007、桃崎 2013）。ただし諫早が指摘するように（諫早 2012）、新羅におけるこの時期の最上位階層の馬具の実態が明らかではなく、これらの馬具が直接的に新羅王権との関係をあらわすものかは検討する必要がある。

#### (2) 鍛冶具

5世紀初頭の行者塚古墳では鉄床1点、5世紀前葉の百舌鳥大塚山古墳（大阪府堺市）では鉄鉗1点、五條猫塚古墳（奈良県五條市）では鉄鉗2点、鉄鎚3点、鉄床1点、鑿8点が副葬

表1 古墳時代中期前半の朝鮮半島系遺物の副葬状況

地域	古墳名	墳形	墳長	馬具	鎧治具	鉄鋌	土器	玉類	鐏子状鉄器	鐏手状鉄器	帯金具	鉄鍔	その他	備考
4世紀末 (布留式期)														
河内	津堂城山	前方後円	210										三葉文環頭大刀	古市
河内	交野東車塚	前方後方	65						●				筒形銅器	
和泉	風吹山(第2主体部)	帆立貝式	71						●				象嵌環頭大刀	
5世紀初頭 (TG232号塚)														
河内	厩塚	帆立貝式	73						●				筒形銅器	古市
河内	大塚山	前方後円	168		●								鉄柄付手斧、(鉄鍔)	百舌鳥
和泉	持ノ木	方	12				●							
大和	室宮山	前方後円	238				●							
播磨	行者塚	前方後円	99	●	●	●					●		鍔冠鉄斧	
丹後	奈具岡北1号	前方後円	60				●						銅釘	
5世紀前半 (TK73型式期)														
河内	鞍塚	帆立貝式	51	●		●								古市
河内	七観(西柳)	円	56	●							●		鉄柄付手斧	百舌鳥
河内	心合寺山	前方後円	140										三葉文環頭大刀	
大和	南山4号	円	18	●		●	●							
大和	五條熊塚	方	32		●						●			
大和	赤尾熊ヶ谷3号	方	15					●						
近江	新聞1号(南)	円	36	●							●			
5世紀2/4 (TK216型式期)														
河内	野中	方	37	●		●	●							古市
河内	珠金塚(北柳)	方	27					●		●			鉄鍔(南柳)	古市
大和	大和6号	円	30			●								佐紀東群
播磨	宮山(第2主体部)	円	30	●		●					●		垂飾付耳飾、三葉文環頭大刀、銀鍔金貼環頭大刀、胡鍔	
	宮山(第3主体部)	円	30	●		●							垂飾付耳飾、銀製指輪	
山城	宇津久志1号	方	7					●						
山城	芝ヶ原9号	円	27				●							
近江	新聞2号	方?	20			●								
紀伊	貴志川丸山	円	42			●								●

備考欄の古市、百舌鳥、佐紀東群はそれぞれ古市古墳群、百舌鳥古墳群、佐紀古墳群東群を表す

された。

百舌鳥大塚山古墳は全長168mの前方後円墳で、上石津ミサンザイ古墳の南に位置する。副葬品のみの埋葬施設とみられる4号粘土槨から鍛冶具が出土した。五條猫塚古墳は近内古墳群に属する一辺32mの方墳であり、紀の川、吉野川水運を押さえていた地域首長墓とみられる。

村上恭通氏によって、5世紀前葉には北部九州（福岡県）、近畿地方（兵庫県・大阪府）にみられた鍛冶具副葬古墳例が、5世紀中葉以降には各地に広がっていくことが指摘されている。また鍛冶具副葬古墳のうち、5世紀中葉までの厚葬墓の被葬者には、鉄器生産の統括者や管理者層が想定されている（村上2007）。

朝鮮半島では、鍛冶具副葬古墳が加耶・新羅に集中しており、分布の偏りが顕著である。このうち、新羅では5世紀中葉以降に鍛冶具の副葬が見られるようになるのと寺井誠氏の指摘は重要である（寺井2019）。

### (3) 鉄鋌<sup>4)</sup>

5世紀初頭の行者塚古墳では40枚の鉄鋌が出土し、その形態から金海地域のもものとみられる。通常日本列島では鉄鋌と共伴しない鍛冶具（鉄床）も出土している。

続く5世紀前葉の南山4号墳出土の鉄鋌18点は、その形態から金海・釜山から咸安地域にかけて分布するものである。鞍塚古墳は帆立貝式古墳（全長51m）で、木棺外に鉄鋌が農工具とともに副葬されており、5枚の鉄鋌が重なった状態であった。

5世紀中葉の野中古墳（大阪府藤井寺市）は、墓山古墳に近接する方墳（一辺37m）であり、並置された5基の木櫃のうち、1基に鉄斧・鉄矛・刀剣類とともに鉄鋌が副葬されていた。鉄鋌には2つのサイズがあり、数枚が重なったものも含まれ、130枚以上が副葬されていたと推測されている。

大和6号墳（奈良県奈良市）では、872枚という多量の鉄鋌が副葬されており、大・小のサイズがある。大型品には複数枚の鉄鋌を鍛接した痕跡が観察でき、国内で最終的な製作がおこなわれた可能性が指摘されている（清喜2017）。

野中古墳や大和6号墳は、大王墓とみられる墓山古墳やそれに次ぐウワナベ古墳の陪塚であ

---

4) 鉄鋌の用途に関しては、大きく鉄素材説、鉄製品（儀器など）説、貨幣説に分類される。東潮氏は鉄鋌を鉄素材であると同時に貨幣的な交換価値をもつとみた（東1999など）。村上恭通氏は鉄素材ではなく威信財として理解する（村上2007など）。筆者は、時期や地域によって鉄鋌の機能は変化するため、その定義は一定ではないと考える。鉄鋌から製作された鉄器（有刺利器や馬具）の存在が確認できることから、すなわち鉄素材でもあり、また鉄製品の多量副葬志向から威信財的な性格も有すると考える。



り、多量副葬された鉄鋌は王権中枢における鉄素材（鉄鋌）の管理・掌握の一端をあらわす。

一方、朝鮮半島において、鉄鋌は加耶および新羅古墳に集中する。なかでも新羅王陵である皇南大塚南墳からは鉄鋌1300枚が出土しており、他の古墳を圧倒している。同墳を5世紀半ばの築造とみれば、野中古墳や大和6号墳とほぼ同時期かやや遅れる時期となる。

また、それまで類似した鉄鋌を副葬していた金海と釜山地域であったが、5世紀に入ると、その形状に違いがみられるようになる。新羅様式の土器が副葬され始めた福泉洞21・22号墳<sup>5)</sup>から釜山地域の鉄鋌を新羅産とみる見解もある（朴2007）。ただし、皇南大塚南墳以前の5世紀前半代にあたる新羅中央（慶州地域）の鉄鋌の様相は必ずしも明らかでない。また、金海地域では5世紀初頭の大成洞1号墳を最後に大型墳が築造されず、後続する古墳から出土した鉄鋌の形状は福泉洞古墳群と類似したものである。

このような朝鮮半島における状況をふまえると、5世紀代の金海・釜山地域の鉄鋌には新羅の影響が少なからず認められるが、鞍塚古墳や野中古墳などから出土した鉄鋌が直接的に新羅王権との関係をあらわすのかは今後の検討課題である。

#### (4) 陶質土器

4世紀末から陶質土器が古墳に副葬された例が確認でき、TG232号窯併行期に加耶系土器の出土が集中する。このうち、持ノ木古墳（大阪府岸和田市）や奈具岡北1号墳（京都府京丹後市）の事例からは、古墳祭祀に陶質土器が用いられ、渡来人の祭祀への関与が指摘されている（白井2000）。

4世紀末頃の持ノ木古墳は一辺12mの方墳で、周濠に転落した陶質土器や初期須恵器が検出されている。両者を峻別することは容易ではないが、鉢形器台は福泉洞31・32号墳例に酷似することが早くに指摘されている（定森1997など）。

5世紀初頭の奈具岡北1号墳は全長60mの前方後円墳である。第1主体部の墓壇上面から陶質土器と初期須恵器が出土した。鉢形器台や高杯の一部は陶質土器とみられる。管見の限りでは高杯の類例は確認できないものの、器台は釜山地域の福泉洞21・22号墳などに系譜が求められる。

室宮山古墳（奈良県御所市）では、後円部円丘壇東端から船形土器や台付把手壺などの加耶系土器が出土しており、後円部北主体部の副葬品と推測されている。このうち船形土器は、豎板や舷側板の形状等から、馬山地域の県洞古墳群から出土した船形土器に類似する。

5) 釜山地域の福泉洞古墳群では5世紀以降にそれまでみられなかった新羅土器（洛東江東岸様式）や金銅製冠が副葬されるようになるが、この変化を新羅の間接支配とみるのか、影響の度合いや歴史的な解釈については研究者によって一致をみていない。

南山4号墳では墳頂部から陶質土器3点（高杯形器台・四口壺・動物台付角杯）が出土した（竹谷2006）。高杯形器台は、脚部の菱形透かしや全体の形状から咸安・馬山地域を中心に分布する阿羅加耶系の土器とみられる。咸安梧谷里遺跡の建物址34号から出土した無蓋高杯に類似する。四口壺とも呼ばれる燈篋形土器は台脚の有無の違いはあるが、金海・釜山から咸安地域にかけてやや広く分布するもので、類例として福泉洞53号墳例がある。動物台付角杯もやはり金海から咸安地域にかけてみられる。台脚の文様や形態は著名な伝金海出土の騎馬人物像土器に似ているが、角杯が動物の背中に取付く点で異なっている。この遺物は日本列島で最も古い角杯であり、金官加耶ないしは阿羅加耶から搬入されたものと考えられる。

5世紀中葉の野中古墳では墳丘上から多量の初期須恵器が出土し、供献土器群と評価されている。木櫃の一つからは加耶系とみられる小型把手付壺・蓋が出土した。

芝ヶ原9号墳（京都府城陽市）では墓壙内から加耶系の台付把手壺が2点出土した。本来は有蓋であろうが、蓋は出土していない。

## (5) 玉類

渡来系玉類<sup>6)</sup>を副葬した古墳には、5世紀初頭（TG232号窯併行期）の風吹山古墳（大阪府岸和田市）、5世紀前葉（TK73型式併行期）の赤尾熊ヶ谷3号墳（奈良県桜井市）、5世紀中葉（TK216型式併行期）の宇津久志1号墳（京都府長岡京市）や珠金塚古墳北槨（大阪府藤井寺市）、宮山古墳（兵庫県姫路市）が挙げられる（井上2020）。

現時点では、風吹山古墳から出土した銀製空玉が渡来系玉類としては最古のものである。空玉は直径1.0cmを超える大型品である。朝鮮半島では金属製玉類の多くが新羅から出土しており、加耶や百済ではわずかにみられる程度である。新羅の月城路カ-13号墳（4世紀末頃）において金製空玉が出現しており、金製と銀製の材質の違いはあるが、ほとんど時期差なく風吹山古墳に副葬されたことがわかる。

やや遅れて、赤尾熊ヶ谷3号墳では銀製空玉に加えて赤メノウ玉類（丸玉と切子玉）が副葬されている。後続する珠金塚古墳では金製空玉と重層ガラス玉が、宮山古墳では金製空玉が、宇津久志1号墳では重層ガラス玉が出土している。

渡来系玉類を最初に副葬した風吹山古墳は71mの帆立貝古墳であり、久米田古墳群内の地域首長墓とみられるが、その後古墳群内で渡来系玉類の副葬はみられない。径30mの円墳である

6) 本稿で扱う渡来系玉類のなかには、その起源がさらに西方（西アジアや南アジア）に求められるものもあるが、朝鮮半島を経由し日本列島にもたらされたものとする。それゆえ、本稿では朝鮮半島三国時代の玉類として金属製玉類や重層ガラス玉、赤メノウ製玉類などを扱う。

宮山古墳も同様に地域首長墓とみられる。一方、赤尾熊ヶ谷3号墳や宇津久志1号墳、珠金塚古墳は小規模な方墳で、渡来系玉類を副葬した古墳の相対的な地位は高くない。このなかで、珠金塚古墳については当時の王権中枢である百舌鳥・古市古墳群に属することから、これは王権中枢における渡来系玉類の受容として評価できよう。

## (6) その他

**蕨手刀子・鐮子状鉄器** 蕨手刀子は、蔚山地域の中山里 I A78号墓や慶州地域の隍城洞17号墓、釜山地域の福泉洞57号墳等で出土している「曲刀子」が祖形とみられ、洛東江東岸に分布している。ただし、「曲刀子」は蕨手文が刃先にみられるのに対し、蕨手刀子は蕨手文が柄の先端にある。日本列島における蕨手刀子の出現は古墳時代中期初頭に位置づけられ、ほぼ一斉に東海地方から北部九州にかけての地域でみられるようになる（鈴木 2005）。

鐮子状鉄器は、朝鮮半島南部の原三国時代から三国時代にかけての墳墓で広く出土している。日本列島においては蕨手刀子と同様、中期初頭に出現し、大阪府や福岡県で確認できる（吉田 2001）。交野東車塚古墳（大阪府交野市）では鐮子状鉄器が、盾塚古墳（大阪府藤井寺市）では蕨手刀子と鐮子状鉄器の両者が出土した。銀鍍空玉が副葬された風吹山古墳第2主体部からは、蕨手刀子や鐮子状鉄器が出土した。珠金塚古墳でも渡来系玉類が副葬された北槲では蕨手刀子が出土している。

**環頭大刀** 津堂城山古墳（大阪府藤井寺市）や心合寺山古墳（大阪府八尾市）から出土した三葉環頭大刀は、中国漢代の三葉環頭大刀に類似するとみられ（金 2016）、釜山地域の福泉洞古墳群においても出土例が確認できる。これらの大刀は中国で製作され、日本列島にもたらされた（加藤 2013）ほか、朝鮮半島を経由して流入した可能性も想定しておく。宮山古墳出土の三葉環頭大刀は加耶や百済地域で多くの類例がみられる。また、銀鍍金貼環頭大刀は国内外に類例のない特殊な装飾をもつが、製作技法上の特徴は百済地域にみられることが指摘されている（金 2019）。

**鉄鏡** 国内で確認された事例は少なく、行者塚古墳例と貴志川丸山古墳例（和歌山県紀の川市）が知られるのみである<sup>7)</sup>。類例には、金官加耶の前身である弁辰狗邪国の良洞里318号墓例が挙げられる。

**帯金具** 行者塚古墳出土の金銅製帯金具は晋式帯金具と呼ばれるもので、文様表現などか

7) 鏡そのものが騎馬民族と関連深い遺物であり、行者塚古墳において日本列島最古の馬具と一緒に副葬された点は示唆するところが大きい。

ら江南系に分類されている（藤井 2013）。金官加耶の大成洞88号墳でも晋式帯金具が出土したが、こちらは中原系に分類されている。晋式帯金具は中国系文物であるが、近畿地方へは金官加耶を經由してもたらされた可能性がある。五條猫塚古墳<sup>8)</sup>や七観古墳では、晋式帯金具とは異なり波状列点文をもつ龍文帯金具が新たに出現しており、洛東江東岸（新羅）系遺物として評価されている（高田 2006）。このほか、新開1号墳（滋賀県栗東市）では葉文帯金具が出土している。

#### 4 4世紀末～5世紀前半の渡来系遺物を副葬する古墳の様相

ここまで、主に近畿地方中央部の古墳に副葬された朝鮮半島系遺物を概観したが、本章では時期別に朝鮮半島系遺物の流入状況についてまとめたい（図3・表1）。

##### (1) 4世紀末（布留式期）

難波地域および河内平野で該当する古墳としては津堂城山古墳が挙げられる。三葉環頭大刀は中国製とみられるが、朝鮮半島南部を經由してもたらされた可能性がある。また、周辺地域では交野東車塚古墳（北河内）や持ノ木古墳（和泉）において朝鮮半島系遺物が流入している。交野東車塚古墳では鐮子状鉄器が副葬され、金官加耶と関連する筒形銅器（井上 2014）のほか、巴形銅器や帯金式甲冑が共伴している。古墳の西方に位置する茄子作遺跡（大阪府枚方市）ではTK73型式期の須恵器生産が行われていたことが判明している。また時期的には下るが、鉄器生産工房である森遺跡（図1）が同古墳に近接しており関連性がうかがえる。持ノ木古墳では陶質土器と初期須恵器が出土しており、初期須恵器は大庭寺遺跡（大阪府堺市）TG231・232号窯の製品と類似しているとの指摘（白井 2000）は重要である。須恵器生産が行われた和泉陶邑（図1）との関連性が考えられる。

##### (2) 5世紀初頭（TG232号窯併行期）

古市古墳群や久米田古墳群に加えて、百舌鳥古墳群にも朝鮮半島系遺物が流入している。また、瀬戸内および紀の川ルート上に位置する古墳の存在も注目される。

百舌鳥古墳群の大塚山古墳において鍛冶具が、古市古墳群の盾塚古墳において鐮子状鉄器および蕨手刀子が副葬されている。盾塚古墳では金官加耶との関係を示す筒形銅器が共伴している。また、和泉地域の久米田古墳群では、風吹山古墳第2主体部から銀製空玉のほか、蕨手刀

8) 五條猫塚古墳では晋式帯金具の銚板も出土している。



図3 朝鮮半島系遺物を副葬した古墳の分布

子や鑿子状鉄器、象嵌環頭大刀が出土した。

5世紀になり重要性が高まった瀬戸内ルート<sup>9)</sup>上に位置するのが行者塚古墳であり、加古川中流域の印南野台地に立地する全長99mの前方後円墳である。主体部は粘土槨3基が並行して築造されており、墓壇内に納められた中央副葬品箱からは、金銅製帯金具とともに轡が3点出

9) 近畿中央部以外の初期須恵器窯が瀬戸内海を中心に分布していることもこれを裏付けている。

土している。また、西副葬品箱からは鉄製の工具類などとともに巴形銅器4点、鉄鋌40枚、鉄鍔1点が出土した。築造時期は、円筒埴輪の型式から4世紀末から5世紀初め頃（TG232号窯併行期）とみられる。朝鮮半島系遺物としては、馬具、鉄鋌、鉄鍔などが挙げられる。地域首長である行者塚古墳の被葬者は、直接的に朝鮮半島南部とのつながりを持っていたとみられる。

もう少し目を広げると、行者塚古墳の立地する加古川流域を含む播磨地域は、朝鮮半島系遺物が比較的多くみられる地域でもある。例えば、加古川の東側、明石川流域に位置する4世紀後半の出合窯跡（神戸市西区）は、窯の構造から百済との関連が指摘されており、出土した土器の形態も忠清南道天安市清堂洞遺跡や忠清北道鎮川三龍里窯跡の百済土器に類似している（酒井2004）。また加古川の西側、市川流域には、後述するように鉄鋌や垂飾付耳飾、金製空玉が副葬された宮山古墳が所在する。

南海道ルート of 要港である紀伊水門から奈良盆地にいたる紀ノ川ルート（寺沢2000）では、荒坂峠から風の森峠を越えた地点に室宮山古墳が立地する。大型の前方後円墳（墳長238m）であり、船形の陶質土器が出土した。渡来人たちが集住し、武器・武具などの重要な鉄器生産を行った大規模な工房跡が検出された南郷遺跡群（奈良県御所市）（図1）が近接する。

### (3) 5世紀前葉（TK73型式期）

百舌鳥・古市古墳群において馬具が副葬され始めた時期である。大和では盆地南部のこれまで古墳が造営されなかった地域において、朝鮮半島系遺物を副葬した古墳が散見される。

百舌鳥古墳群の七観古墳や古市古墳群の鞍塚古墳がこれに該当し、いずれも大王墓に隣接する古墳である。馬具には新羅の影響が認められるとともに、七観古墳では新羅系の龍文帯金具が共伴し、鞍塚古墳では鉄鋌が共伴する。

大和では盆地南部の南山4号墳、赤尾熊ヶ谷3号墳において朝鮮半島系遺物が副葬された。このうち南山4号墳は、香具山の南東に立地する南山古墳群に属する。直径18mの円墳である。主体部は盗掘されていたが、墳頂部から陶質土器3点が出土している。また、これとは別に副室からは轡、鉄鋌、鉄鍔が出土している。南山4号墳は、古墳の規模や墳形からみて有力な古墳ではなく、周辺にも朝鮮半島系遺物を副葬した古墳は存在しない。ただし、近接する集落遺跡（山田道下層遺跡）（奈良県明日香村）からは4世紀末から5世紀初頭の陶質土器と軟質土器が出土している。その系譜は加耶および百済に起源が求められ、一つの集落に複数の系統の渡来人集団が生活していた可能性がある。飛鳥周辺に渡来人の存在が確認できる最初の資料といえ、この頃から近畿地方中央部でも百済との関係を示す考古資料があらわれてくる時期にあたる。

五條猫塚古墳は紀の川、吉野川水運を押さえていた地域首長墓とみられる。この時期の紀伊水門周辺では鳴滝遺跡（和歌山県和歌山市）において7棟の倉庫群が検出されており、楠見遺跡（和歌山県和歌山市）では初期須恵器の生産が行われていた。

このほか、近江では琵琶湖東南に立地する安養寺古墳群（滋賀県栗東市）において、新開1号墳に馬具とともに帯金具が副葬された。同古墳の立地はのちの東山道ルート上に位置し、東海道と東山道の結節点にも近い。

#### (4) 5世紀第2四半期（TK216型式期）

この時期は、古市古墳群において継続的に朝鮮半島系遺物が副葬されている。この時期の注目される点として、野中古墳や大和6号墳において、前時期の鞍塚古墳とは比較できない多量の鉄鋌が副葬されていることが挙げられる。このことから、当時の王権中枢における鉄鋌の保有形態や、管理・掌握の一端がうかがえる。

播磨では市川流域に、馬具や鉄鋌、垂飾付耳飾を副葬した宮山古墳が築造された。また、加古川流域の行者塚古墳の対岸には馬具や垂飾付耳飾、鍛冶具（鉄鉗2、鉄鎚3、鉄床1、鑿）などを副葬したカンス塚古墳（兵庫県加古川市）がやや遅れて築造された。両者とも加耶との関連が指摘される竪穴式石室に釘・鋸を使用した木棺を納めており、また須恵器の石室副葬からみて、被葬者は渡来人と想定されている（亀田 2020）。この時期には大加耶系の垂飾付耳飾や百濟系の銀製指輪といった新たな装身具のほか、武具でも胡籜が流入しており、これまで確認されていた朝鮮半島系遺物にも変化が認められる。

このほか、紀の川中流域には大型鉄鋌や鉄鍔を副葬した貴志川丸山古墳が築造されており、大型鉄鋌は慶州地域に類例がみられる。山城では、久津川古墳群に属する芝ヶ原9号墳（京都府城陽市）から加耶系の台付把手壺が2点出土した。

この時期の特徴として、播磨でみられたように被葬者が渡来人とみられる古墳が出現しており注目される。また、渡来人が最初に集住し開発した河内台地北縁部から河内低地縁辺部においても、長原遺跡（大阪府大阪市）に近接する城山古墳群が渡来人たちの墓域であったと考えられている（田中 2009）。

### おわりに

朝鮮半島系遺物は、古墳時代前期までは鉄製短甲や筒形銅器、又鋏などであったが、本稿で検討した古墳時代中期前半には馬具や鍛冶具、鉄鋌、蕨手刀子・鑷子状鉄器等の鉄製品のほか、陶質土器、玉類、帯金具などに変化している。これらの遺物を複数種類副葬する古墳が多く、

なかでも馬具と帯金具、もしくは馬具と鉄鋌を副葬するものが多い。

朝鮮半島系遺物の系譜は、金官加耶を中心とするが、古墳時代前期までとは異なり新羅（洛東江東岸）系や百済系のものが含まれている。特に5世紀前葉（TK73型式期）以降に新羅の影響が認められる遺物が増えるが、これは金官加耶の衰退と大きく関わるものと推測される。

古墳の分布状況については、4世紀末に古市古墳群の津堂城山古墳のほか、周辺の北河内（交野東車塚古墳）や和泉（持ノ木古墳）に朝鮮半島系遺物を副葬した古墳が出現し、5世紀初頭以降は百舌鳥・古市古墳群において継続的な副葬が確認できる。これは、古墳時代前期において河内平野では朝鮮半島系遺物を副葬した古墳が庭鳥塚古墳（大阪府羽曳野市）1基のみであったのとは対照をなす。また5世紀初頭までは、のちの時期と比べて比較的大・中型の前方後円墳、帆立貝式古墳において朝鮮半島系遺物が副葬され、5世紀前葉以降にみられる中・小型の円墳や方墳への集中副葬とは異なる様相をみせる。

難波地域および河内平野への朝鮮半島系遺物の集積については、現時点では4世紀末から始まり、本格化したのは5世紀初頭における百舌鳥・古市古墳群への副葬が開始された時期と判断できる。古市古墳群において仲津山古墳、続いて百舌鳥古墳群において上石津ミサンザイ古墳といった大王墓の出現とも軌を一にする。

韓式系土器の研究では、河内地域における渡来人たちの集住のピークは5世紀第1四半期と5世紀第4四半期とみられているが（田中 2005）、土器以外の朝鮮半島系遺物の流入については詳細な検討が行われておらず、漠然と古墳時代中期になって流入すると考えられてきた。今回の検討によって、河内平野を中心とした朝鮮半島系遺物の具体的な流入様相が判明した。また、朝鮮半島系遺物が副葬された古墳とヤマト王権の生産基盤が置かれた地域との関連性も指摘できる。すなわち、持ノ木古墳－大庭寺遺跡、交野東車塚古墳－茄子作遺跡・森遺跡、室宮山古墳－南郷遺跡群などがその例である。

さらに瀬戸内ルート、南海道ルート（紀の川ルート）、日本海ルートから朝鮮半島系遺物が流入する様子がかがえる。河内平野への物資流入に関わる瀬戸内ルートでは、大阪湾の難波津のような港湾施設を通じて遺物が流入し、5世紀中葉にはこれらを集積するために法円坂に倉庫群が設置されたのであろう。同じく瀬戸内ルートにあたる播磨では、加古川や市川などの河口から物資が流入し、南海道ルートにも港湾施設（紀伊水門）が形成され、周辺には須恵器窯や倉庫群が計画的に配置されたと推測される。



## 【参考文献】

- 東潮 1999『古代東アジアの鉄と倭』溪水社
- 諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣
- 井上主税 2014『朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係』学生社
- 井上主税 2016「騎馬文化受容前後の倭と百済・加耶との関係」『発見・検証 日本の古代Ⅱ 騎馬文化と古代のイノベーション』角川文化振興財団
- 井上主税 2020「近畿地方における古墳時代中期前半の渡来系玉類の様相——」『柳本照男さん古稀記念論集——忘年之交の考古学——』
- 植木久 2009『難波宮跡』同成社
- 加藤一郎 2013「第五節 津堂城山古墳出土の刀剣類について」『津堂城山古墳——古市古墳群の調査研究報告Ⅳ——』藤井寺教育委員会事務局
- 亀田修一 2020「列島各地の渡来系文化・渡来人」『シリーズ古代史をひらく 渡来系移住民——半島・大陸との往来』岩波書店
- 金字大 2019「刀剣から読む古代朝鮮と倭」『刀剣が語る古代国家誕生』（第4回古代歴史文化講演会）
- 酒井清治 2004「須恵器生産のはじまり」『国立歴史民俗博物館研究報告』110
- 定森秀夫（韓永熙訳）1997「初期須恵器と韓半島製陶質土器」『韓国古代の土器——土・芸術・生と死』国立中央博物館
- 白井克也 2000「日本出土の朝鮮産土器・陶器——新石器時代から統一新羅時代まで——」『日本出土の舶載陶磁』東京国立博物館
- 白石太一郎 2009「4世紀の東アジアとヤマト王権の変革」『河内平野の集落と古墳——謎の4世紀を探る——』（大阪府立近つ飛鳥博物館図録49）
- 鈴木一有 2005「廠手刀子の盛衰」『待兼山考古学論集——都出比呂志先生退任記念——』
- 清喜裕二 2017「総括」『宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号（大和6号墳）——出土遺物の整理報告——』宮内庁書陵部
- 高田貫太 2006「5、6世紀の日韓交渉と地域社会」『考古学研究』第53巻第2号
- 竹谷俊夫 2006「陶質土器」『大和の古墳Ⅱ』人文書院
- 田中清美 2005「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版
- 田中清美 2009「河内の渡来人」『河内文化のおもちゃ箱』批評社
- 田中清美 2014「古代難波地域の渡来人——5～6世紀を中心に——」『難波宮と都城制』吉川弘文館
- 寺井誠 2019『渡来文化の故知についての基礎的研究——新羅・加耶の要素を中心として——』
- 寺沢薫 2000『王権誕生』講談社
- 菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 藤井康隆 2013「大成洞88号墳の晋式帯金具と中国・倭」『最近の大成洞古墳群の発掘成果』
- 村上恭通 2007「鍛冶具副葬論」『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 桃崎祐輔 2013「近年の韓国出土古墳時代馬具と日本列島の馬具の比較検討」『第1回共同研究会 日韓交渉の考古学——古墳時代——』「日韓交渉の考古学——古墳時代——」研究会
- 吉田和彦 2001「毛抜形鉄器」の機能・用途認定に向けての基礎的研究（1）『史学論叢』第31号
- 金跳咏 2016「加耶の武器」『加耶考古学概論』ジニンジン（韓国語）
- 朴天秀 2007『新たに叙述する古代韓日交渉史』社会評論（韓国語）  
（紙幅の関係上、発掘報告書等を割愛した）

